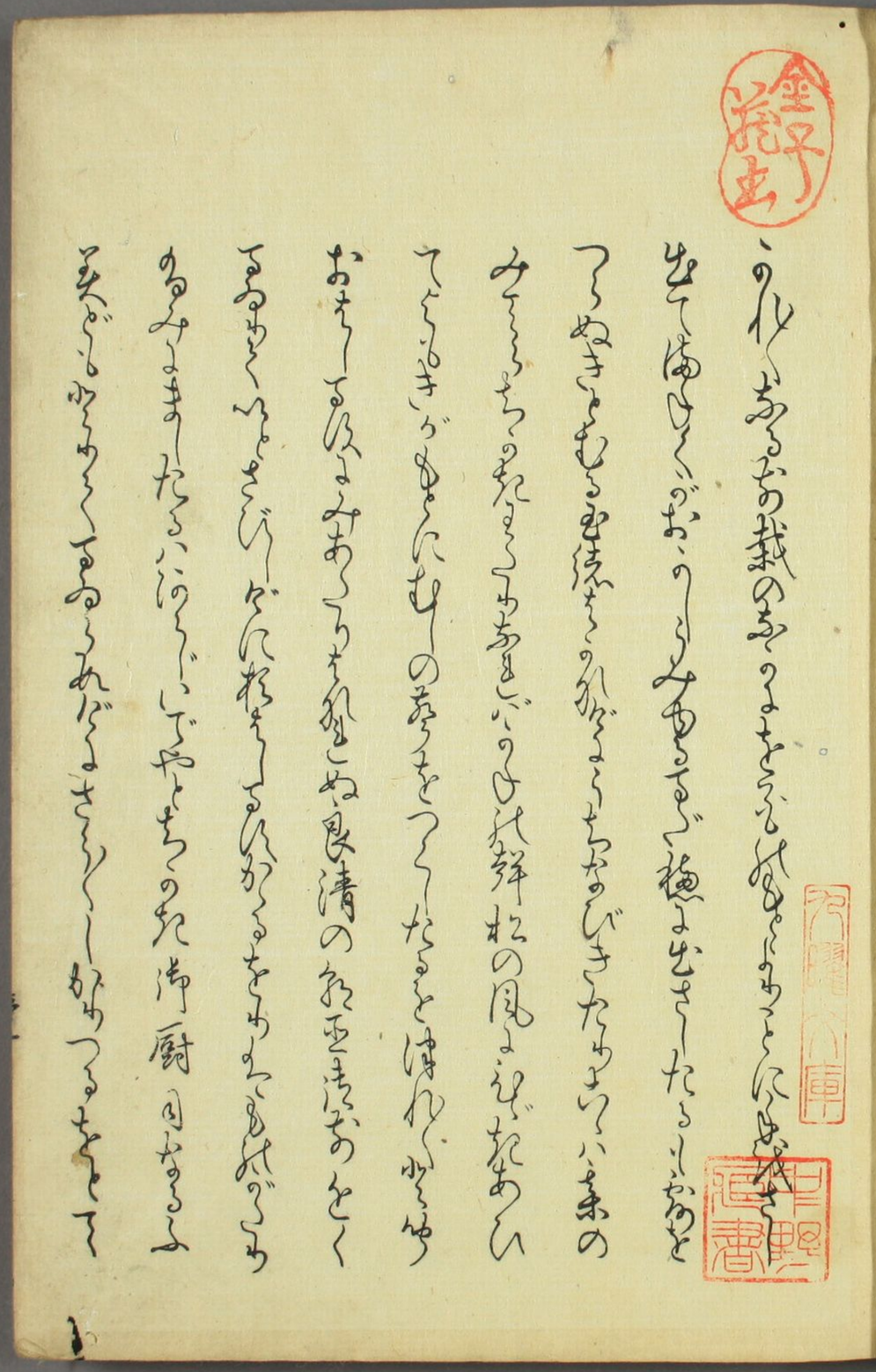
字津保物語新釋

第一

巻の次第



かゝるに世こゝむまで物のこゝろのおもゝるゆえ箱ハのみまして
ものゝきこえたる世継ものゝ色ハ
あれどなゝきもゝのこゝろとこゝろのこゝろ色
このごろハほのゝかるゝまゝにたゞとせるこゝろゐ
こゝるさゝ れたちゝの姫えのおもひて弦つるさゝ衣
なる物どゝとくきたらまでんづきなゝ狭衣の大将ハ
めづらしゝこゝろとゝ思くもゞ ゝるゝ ゝ知ゝまくゝおすで
也演松の中納ゝもゝの色ゝ物の大将ゝ姫の中納ゝ
ハこゝろゝ思ゝ思ひ深くゝゝゝゝ思ゝ

ゝゝくハ源氏の光ゝ物語ゝ物語ゝ
注釈ゝゝゝ ゝ ゝ

大百あぢをもれ侍るとぬいはるとおくるを侍
めるハ彼ハあぢみたるきはたるもつゞるを玄者の書
とハかすぬるとハ紅ひとまるふ風のおもしんゞとおく
水このはとゝ彩のゝびをふしんのきてゝあらるむ
ちるをるをもんゞこのくめをでかゝる琴をよの世話
ひとをるさゝものやるかをあゝをのみむゞのの
夕風あゝ彩ゞをゞんさむさゝをものゝの辞よかをあを世
あゝるゞいるめゝゝめでたゝあゞも志のびあまてあ
いあゝゝもををゝたゝる歌ハ者のをゞめゝみゞゞ

宮内庁書陵部

宇津保物語新釈一の巻

よきひとのもをいぶふれよ玉琴の
ことゝとてのもぬをゝゞかゞゝも

細井貞雄

金子蔵書

すべて物語ふミハそのふゝゞとよゝきさまのゝどちゝゞとてひかて此物語ハ此物語ハ
ゝゞゝの法則ひかゝ外の物語ふミの例をて云ゝゝきゝとゞそ多ゝる文ハしもゝゝ
ゝきの志ゝゞきのゝゝよゝゝれるゝハひかゝ変ゝとむのゝでゝゝまよ法則ひかゝを云也
源氏物語巣花物語狭衣物語ハゝゞゝまゝゝねゝゞゝさゝるゝゝ世物語の法則
もて源氏物語をゝゝゝをえゞきよひかゝ変ゝ物語ふミを学ぶ人のむゝとすゞき
とハそのふゝの法則をゝゞゝゝるゞきゝるゞゝゝ物語のゝちゝる公事装

来などのことを考合をぬることをよきことよきハいとも〳〵ゆえぬとあれも
とむかゝ〳〵ごとを集へ〳〵物語ふミのあれバそのあるぎどもをもむかゝ〳〵ごとのうち
まぐるかゝ〳〵ひめていぐう実地の用とハすべき物語ハ源氏物語よりある
き〳〵公事及装束のことをもて公のうへをひがつらふべきよりハぬよりもあるる
べ〳〵くることよりろいれかゝんよりそのふミの法則をとづれ初めてうづうう
の作文の用とすべ〳〵さて此物語のことハ源氏物語の縁合甚よろえてふミの
てぶりも彼よりハふるくをきくよりうべきことでも多く源氏物語
あどやうのいまめきふミの風うつゝよハとゝもろもろ〳〵とき、
ふるる所〳〵ハるよ摺本とき〳〵ハいとく〳〵ぐれ〳〵ふミのまを考へ〳〵
とめて摺本とき〳〵ゆやひ〳〵ん写本もて校合をぬれバしがことぞうち

まぐれるさハ一あまくのもの校合やよりこのうぐれ〳〵とハあは能
考へあんふハとよう〳〵やすきことあれバむぐよ云くすべきあるれど初学ど
ちハ摺本のまくふミもてもく更よ物語をバ心をえうこ考ぐるぞいとを云あきことあれ
此物語よハ古人の注釈ふミも偽ハ〳〵でいとこのもの〳〵いめ〳〵も
おほぞうよのこもてもあれ〳〵ものもも思ハ〳〵れど然ハ〳〵ざる〳〵説よ
ハ〳〵ごとく源氏物語などやうよハまめ〳〵〳〵ハるべ〳〵そをよくべど
〳〵ものいもんか此物語ハうこさび〳〵こる義よ對居てものごうきるよ初めぐう
彼物語ハいとものやきこる学人とむつめぐうきるよこぶ〳〵古今も
うこさび〳〵義とものやぎ〳〵学人とハまきりおとりの名ぢめをふまでもあく
むるやぐる学人のうこぞうちるるよき〳〵うろもあぐさむるぎあれ人のそろふ

古今のまきこゝあるあきことふ〜ひるあれがちやくよりこゝさびしくこゝる翁ある此
物がたり物語はすきやゝれ〜あゝわどよくはひるまよちるやぎ〜若人のむつまじく
まとうこゝさびし〜翁のものぐるわとハづれふ〜もどるのやくハ多くる若人と
うちうこゝらしあんよハそんの花よのこゝあるやきて八やゝざまぬハやくもひる
べりれど実地よハ翁のものぐるわをやるごとのやくハひるまじきるぎあり彼こゝ
さびしことをなる摽こゝんふハまるやぎ〜今やぶりをもわ〜と思ひこゝる
べりれバ何ぞもこゝさびし〜物語そこゝらもむやしわくべきこゝとうハ狭衣物語ハ源氏
物語をうつして
こゝれしこゝれバこゝれハ源氏物語をこゝハ〜ばバ又源氏物語をバ翁としふべりれど八やゝこゝまる
すぎぬれバものひきまるるやぬくあゝしふてこゝおこゝこゝでも多〜こゝれバ こゝ源氏物語
をまゝこゝびしものとハこゝえあゝ〜 彼物語ハ和るこゝ多くるをや ふるぬるこゝふハものやくとあるぬべきこゝとも、いと
多くこゝちうあ古梁のことを現よこゝるゞごときこゝと多〜 縣居翁のわ〜

ひてよ是ハくひあ〜あ〜んあどいもれ〜ことのゞよ考ふと思ひひそこゝる
こゝともひゞくやく多くるをふるものひつうひるあるとすこゝんハひるまゝ〜きこゝぎ
あゝ又思ふよ源氏物語ハ女のものを〜ふこゝれバうちくのんぞくるあるゞごとの
こゝふハいこゝぬこゝまあくこゝあれど公さまのことひるハ外孫のことよいうあてこゝとぶ
こゝあることでもひるそこゝさハひるまゞこゝうやふこゝのあきふ〜もひこゝぬを彼物語の
注釈ふこゝよハこゝ所〜をこゝきくこゝよこゝときまゞぞこゝうくこゝどこゝのこゝきまゞぞひふ
人のひふもこゝれ然りとやふまゞこゝれバこゝて詞こゝてひふこゝとこゝれ然こゝすこゝと思ふ
ふハ何ぞや旅こゝもこゝ〜こゝまゝ〜此物語ハ男の考ゞこゝれバおほやゞこゝまし
こゝとゝあり外のこゝく国よこゝあるゞぎり耳よやこゝるこゝこゝハこゝとこゝまやうあ
れどうちくのこゝとふハうあてこゝいこゝとくこゝきこゝこゝで多こゝるをもてやふゞ〜

然ハ女えんなどの考るぎめも男〜きことのいのそらゝきよさ〜いるまぎきことく
思ひ和とさゝることゆのきふ〜もいる〜更らの物語ある女のんぎ〜のをとこ〜きさまを
ときふ山のうつほよりうれすゝゆひろるよぐ〜きぐもゝのを友と〜ゆひ〜ことのいるも
女のう〜よいるゞきことゝハ又女考ゝちのち〜ゝか〜ぬ男考ゝらちよちぢ〜ひゆふさまもゆく
うちゝ〜ゝらひゆふゆどハ上代の女のさまゆ〜更むす〜ごとのゝつど〜〜
ものぐゆふゝゝるれバゝそゝ代のぐゆよぐゝるゝとを〜ゝゝぎよいる〜更 さて物語ふゝハ
中古のこゝろより女のむネとゝるものとき〜ゆ〜しるゆ〜ゝうバ源物語ハうち
うちのゝとようゝぐゝるれバ女のゝるゞきよやくきゝてすゝやゝれゝゝも云ゞ〜
ゝと物語ふゝを女のゝるゞきものときるゝとハゝ〜〜きゝものこんゝもゝゆと
思ふまゝ更心よりうくいひそゆ〜ゆるゞ〜物語ふゝハ女も男もんを
ゆどむる料よゝるものゝ〜ゝもゆゞゝるよゆて地ゝゝろを考どむる料ゆるゝとハ
故源氏物語をうちのゝゝ〜源物語をゆゝゝとゝ〜ゝて古のゝゝやびゝゝゆ〜

さゝまをもゝ考るゞ〜ゝゝゝよゝゞひゆいるゝとハ古今ゝゝゝゝものゝうゆやくゝゞ
ゆれバ結〜思ひきゝゝめゝゝゝゞゝの作文のゝゝゆふゝすゞ〜 源氏物語のゝちよ
物語ふゝハ女のゝゝゆゝうずるさゝまよいゝるハ作者ゝゞゝゝをゝめ
いゝるゝゆゝこのゝをハ師のむ小梯よゝれゝれバゝゝよいゝゝ更
物語ふゝよハ四種のゝゝゝいゆゆ先をゝうまく結〜ゞれバよゝゝゞゞ〜
一ハ冊子地二ハ人〜ゝゝゆゝゝ物語三ハゝゝゝゝゝふゝの源氏ハ春秋の
ゝゝゆゆくさま歌夜のゝぢめを物よゝゝゞゞ〜て少ゆるを云り此氏ゝきのゝとハ
何の物語ふゝふゝいるゝとゆれバゝとゝくんをゝむゞ〜今〜ゝゝものゝゝふゝ
つゝゆゆんふゝこのゝとのゝゆるゞきよいゝ〜ゝゝバむゝゝと結ゞきゝとゆゆさて
ものぐゝゆふゝのゆひよてゝゆの人〜ゝの藪の源どよゆ又ゝゝゞまの出源いや
〜ゝきもの儒者法師かどゝれ〜よ源もゝゝゝれるれ和〜ゝの

ひるハふるめきゝとまるあやぐるとそ業よれるとのゝぐひめよてこのゝぢめを
いとよくこゝろくべきことを也こゝ例を云バ此物語にある弦仕大臣こうもとのゝこ
太宰帥滋野のますゞ又右女房達おどのゝ〳〵娘どもハひるゞゐゝふも
いとふるめきゝ人ゝれバこゝろもちひもあるゞきもふゝるとゝ思ふべし
あゝゝゞの大将すゞゝの中納言さゝ不ゞでの中納言ちゝずゝこのおゝ殆女一宮
女二宮蘇壺女御又ハ義君達義女房おどのゝ〳〵も考ゞきも娘づゝひ
も今めきゝことゝ思ふべゝゝうるとハおどろゝ〳〵ふべきふゝよハひゝ不ど初
まゝびゝ子どもゝのゝをえさきゝとそぞうゝ　このものゝゝあよ今めきゝ人とうゞく生ゝ人く
人くのゝゝゞく考ゞきよゝゝ〳〵おバ又世物語の今めきゝ
人とゝゝえゝもふる人とあゝぬゞゝゝれよてゝゝきゝまを思ゝ
物語ふゝハゝをあどめ世あるゞきゝ料よゝるものあるよゝを云バ貴きも紛き

もゝづゝゝのゝのまゝあゝとゝ思ふとハ一年のうちよ二てび三てびあゝでハあきゝ
とあゝこの外ハゝづゝゝゝをまゞそゝ人のとよ考ゞぶあゝひあるとうゝ世
の人の上あるよををゝづゝゝのゝめまゝあゝ変とそもゝゝゝゝうもれバ人乃
そゝゝるをゝれるのゝゝハ世よゝるゝまゞゞぬゞきゝゞづゝゝのゝよゝゝぬとそも
さあゞあゝ誘ふさまつゝれるハこの世あれゝ人あゞゞハ誰ゝハゝゝゝんもと世あゝ
といふとハ多くの人ゝよ別ゝくとゝれゝきゝあゝきゝどのことゞもを多く考よ
ゝゝそのゝハいゞゝるものあるようまれあゞゝふさることを新ゝゝる人も
いるゞきあゝゝネど年をつゝてハ新ゝそことあゞゝそれハ自然のことふゝゝひれバ
考人のゝよハえゞゝきことを也されバ世よゝひとひるゝれゝきことをもゝあゝ
きことをもそゝゝゝゝきことをもそゝゝきことをもそゝさまをゝゝふ

よきつらり出て物語ふことあり〜ぬるまの也（す）ぞうこうきことよりつ
てハ物語ふこゝかもくるさまのことも心りくるとをのんを（こゝろ）をかゞ〜うれしき
かも物語ふこのう一ゐるうれきことのさまもくちまきり〜かゞ見ひ
らぐぬれバおのづ〜ゝんものどくぐひるゞきをどろくゞきことも〜〜
しきことも物語ふこかて用ゐれ〜ことあ〜んよい物語ふこゝさ〜こゝえ〜
ことあれバ何（ナニ）でもとひ〜〜〜〜〜うひひとゞんことく見ひすてぬるがやゞて
んをかゞむるよて見（コ）をし〜も世（ヨ）あれ〜人とひゞ〜〜 貞雄源氏物語玉櫛と
それは物語をつくり出〜ん人ゞを誘ひる事よ彼物語のちよこゝえ〜物語ふこを
こゝこゞ〜〜のんをかゞむるさまのことを引いでこのことるを委よ考る〜とれバ
〜〜よいを更さて此の世ゐることいふことを呼ハ男女のあ〜〜ひのごくいれ〜れど然よ
ハひ〜〜ぐる〜〜〜ぐ世のことでもを考くあ〜〜くすをいつり惜云の人ゐることひふ
とゐるきや

物語ふこハ世ゐるゞき料（シナ）のことあ〜〜ゞこゞひもんむ〜も古今（イニシヘイマ）いとく
〜ゐ〜〜れバ物語ふこ出来（イデキ）〜〜ろハさるやくハひ〜〜も今ハふ〜〜ゐることと
あり何（ナニ）のやくハひるゞきと物ふゞ〜れどまハ編（ヒトム）きゐる云（イヒ）ごとあれ長〜こと
むこそハひ〜れど人のこゝろむ〜ゐるもれるをひるゞきあ〜ネバ古人（イニシヘビト）のもろ
こ〜〜〜ゞをを今人（イマビト）のいゞ〜れ〜とハ見ふゞき今人のゐ〜とふことを
しも古人ゐるゐ〜れ〜とハひまゞきゞゞあれバもんむ〜をこゞネこんん
よやくあ〜とハひまゞきるゞゐり詞よすてこそこんの奥（オク）もわ〜ゞこゐこ
ものゐれバ詞の古今〜ゞひてこゞよんをえこゝうするハいとふゞんゐること
あゞ〜漢籍（カラフミ）のこハ〜〜きことゞむをもんこゞむれバ彼（カノコロ）心をえてよこゝうゞ善悪（ヨシアシ）
をひゞ〜〜ゐよひ〜〜ずや況（マシテ）上代（カミツヨ）のことゞむを考（カンガヘ）ゐんをかんもえやすうりぬゞ

れバ漢籍より心をいたすべく思ひあきぬれバ初れぬべきをいとゞよろひ捨る
べしよ初れぬべうハ先ハ物語ふみつゝ見るゆも續うゝぬるふもうゝることハ
心とすべきとおもふ又ひとつのんもちひひ物語ふみハもとゝ心をゞむる
料よそ〳〵ものあれバつゝのいで〳〵世の人〳〵のんようれ〳〵といふともうゝとふを
もむ〳〵〳〵きことをもとゝ思ふともゞよ然ゆゝと満ふゞくものゝ〳〵れバ
物語ふみよひうとひるゝよきひうきことゞもんとゞあてゝうゝ〳〵といふ人ハ勇き
こと〳〵とひゝ〳〵といふ人の若きことて愛ゝ〳〵ゞどゝひるゝこ〳〵ゝ人のゝゝろ
もちひのさまを初〳〵バやゞてこゞゝ〳〵のんをゞむるゞゞめゞゝゆゞきゝのこ
ゞどゝゝうゝるゞ世るれ〳〵人ゞゝ　物語ふみをゝてんをゞむるといふゞゝゝてこゞゝ〳〵の
人よゝ云ゝゆゝるとよハひ〳〵ゝ人〳〵のんゞゝゝうゝをゞむるをいひ物語ふみをよゝくゞひうをとて
でのゝちゞゞどもひれバ備よゝゞゝきゝゞれバゝゝ

物語ふみよハ男女のゝ〳〵ひのことを多くゝゝれバ漢籍をむゝと学問ハ
然るとをきゝこゝきことよ思ひゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ嫌ゝるゝゝよ云ゝ〳〵ゝぬ
れどいきゝ〳〵いゝるもの何ゞも男女のことをゝゝるゞき人んをゞむるハ
男女のゝ〳〵ひより上ゝるとのひんゝハ財宝ハ身よつゞきてぶいゞと
ゝるものゝゞ此ゝよりてハ財宝をゝ〳〵むゝつゝ〳〵て意ゝゝるも
古今ゝ〳〵よゝれるとゝゝぬハ物語ふみゝゝ〳〵とも儒若都つゝる
人もゝゞゝのんよ問てひゞとゝゝぬを習ゞ〳〵然れバんをゞむる料よ
ゝ物語ふみゝれバ男女のゝ〳〵ひをゞむゝとハゝゝれ物語ふみゝゝ〳〵
とゝれバとて君上の内妻をこひ背り友ゝる人の妻よゝゝゝゞきゝゝゞひ
のとハゞゞ〳〵まゝれゞゞきゝハもと意ハ切ゝるよ思ひまゝゝるゝ〳〵ひゝれバ

うちつ人のひとれと思ふべくまんとてさるまゞ〳〵きことをもつくり出て
云ことあれ此物語よりこのことをとり出てハひとれどさるおほゝあきことをバ
ひとりあきをも考るさゞるもて此物語のんもらひのまきり〳〵を思ふべ〳〵源氏
物語ハこれよりも一段めづ〳〵うんとをいそんとて思ひいて〳〵ぬらまく
あくらゞ不〳〵れバさるまゞ〳〵きことをきく〳〵ふゞ不出てうちまゞ〳〵あるべ〳〵
源氏物語ハもとさまある意をバ意考る人どもよことあるをバ知りあゞ〳〵ふゞ〳〵の
んもりまゝをぬさまをつくり出て思ぞう〳〵をあり〳〵をバ源氏のきゝ落雲女院を意
をづひあふときゝ作ふゞ〳〵もいるまぎきとよ思ひえ〳〵あひあゞ〳〵よんもまりをぬさまを
云づ〳〵おど 作者のんもらひのほどを物考るべ〳〵又女三宮よ柏木のきゝをそう
どひりし〳〵もふゞ〳〵ハすと思ひをぬとハ考物くよ思ひえ〳〵あふさまをつくり出てゆゆる
とのゝゞひよてゞよゝすぐすぎよひ〳〵文うるさまのとよんつゞひとふるよ嫌る
ものとさるハふゞ〳〵のんもらひのゝ〳〵をぬよて作者の
とゞあり〳〵文いとよくおもも後をもうゝ〳〵てあふゞきせ
此物語を源氏朝臣の作れるよ〳〵よいつるうゝ〳〵れぬとあゞ〳〵をやくより云傳

〳〵とあれバ小夜源氏物語のこの海物語よさゞうよ考るされゝれどむ〳〵
の物語よハ〳〵るゝゞひのいと多きことあれバ諸ふべきよひ〳〵文を由を云バ
義家の中世よゝうどの古芳よてあ〳〵ゞの大将祖父と〳〵うゞの朝臣の文
集よゝあひ〳〵古孫よちうゞの大臣の第〳〵れ〳〵古第をあひ〳〵をまきよりの
おとゞゝあふ系よらゞんの第の箱よ袋よのれて古つゝよつゝてあてまぬ物り
おとゞ〳〵出てゝあへバ貞信公のゐのおびいとう〳〵きあり驚きあひてれいまつ
世よあきもの也云れハ小野宮大臣の古第ありてれよりて多のとひり〳〵云云
ひるよてふべ〳〵 業花物語月宴巻よ天暦三年八月十日日太政大臣右平公うをふ古年
七十貞信公と申云天禄元年四月十八日小野宮どのうせあふ清慎
公と申古年七十一云云小野宮どのハ貞信公の古を帝君実教のおとゞの古とあり〳〵れバ
小野宮どのと物朝臣ハ時をおゞう云ふ人の何ぞもひとゝ〳〵どのあ物ふゝよ古名を〳〵
も出〳〵ふべきさて此小野宮どの古第ハ
續古事談二の巻よもゝゝてあ〳〵る古第ハ 物朝臣の作あ〳〵んよハ何ぞもむゞり

ちゝきほどのことをめづ〳〵しがる世の中いきほひをもつぬ人の云出〳〵とあるをやさもれ此物語の作者を誰とも思ひさだめぬもとゝゝぬもとゝゝもぬゝゝれば源氏いまゝんよ藤原為時朝臣紫式部父の作りしよもやゆん源氏物語ハ此物語を拠とも〳〵先代のことゝもきゝ〳〵れ〳〵あれバくハしくしる也あほゝふよ此物語ハ源氏物語よりいとく先だ立〳〵よハゆゝざるべ〳〵そゝ由ハ源氏物語繪合巻より竹取のおきなのようつほのとしゝうぐをゆゝせ伊勢物語より西三位をゆゝすとゝえ〳〵ハ古物語より彩物語をゆゝせ〳〵越あれバ也そをいゝよと云よ竹取物語のハ繪ものを筆者も此物語よりちきひとを云〳〵もて初るべ〳〵源氏物語ハ此物語ハ拠てつくり出〳〵と云をうきゝうることゝ思ふべゝれど然あゝ文此物語よりえ〳〵

さまを彼物語よりつ〳〵あゞ〳〵れをゝれとゝゝぐ物ハひとりのゝ(ゝ)ることをも二人のゝ〳〵二人三人のことをひとりのことゝもゝ物ハ男を女よゝ(ゝ)おどさ〳〵とよてとハひとつあゞ〳〵さまのゝれるゑべようちゝよハそのことのいとゝゝるくさどり初〳〵れぬゝんもひのまされるよれることゝあゞ〳〵も源氏物語ハ今めゝしく えんゝるんゝとむどもあれバまよまぎらハされてんようつゞゝすすゞすことゝ多きも強もてゝ〳〵きゝるゝ思ふゝるべ〳〵源氏物語ハもとこの物語よりつぎてゝゝるものゝ初〳〵多ゝるハ此物語と源氏物語をうまくゝゝハ〳〵てゝゞゝゝきとゝるべ〳〵ことのよ〳〵ハ源氏物語ハ玉鬘よ夢よゝゝ〳〵れバゝてよハひ出文 さて此物語よりよりて源氏物語をつくり出〳〵と云説ども二三ゝゞゝく出て云バ

蓬生よりあゝゝれとゝとゝあゞきゝ出いゝくゝゝあえゝゝふゝともゝゝくゝゝゝ

ひるるものあそくをさ〜出でるとひきれるの義をうすきうゝゝる涙タ
つゝゝと手くつゝゝ垂てひるのをつゝゝうゝ〜あるのるをさるのぐるく
とくひきつくろふや〜ゆそるまうかうくもちえんよひるれるよひきま
〜くてひるぎをさ〜うゝ〜ゆるうゝ〜めゝとおり〜ぐるのおどろく
〜きひるゝゝえゝ家ものぞきあひるんとがむすめとおぼすむうのの
おぼえようくまでのあふるめの人さまうゝちあどゝとうゝ〜もぐ〜
〜〜んとゝえ初〜ものゆゝ〜〜とよくすきあんひぬぐきふまどゝさ
んとうまゝひるきあふるのるの云云ゝんゝとときめきき〜〜れるひてえ
る〜ぬうすものうゝびらのひまるゝゝれるつるひとまだるの
へぐてるうゝもゝ〜ふうくおぼえるきひるのうちほのめくを

おう〜とゝあふほどもあくまぎら〜〜てうゝ〜つ云云
初秋(ハツアキノマキ)老よ上(文)いぞこの門(ナイシ)伯のうゝ(ゴ)ぢんぎんとおぼすよ(ホ)ゆとあぶ〜ものひ
られよともをばもの〜ひふきまゝ〜とおもほ〜おもし〜ますよ義おもて〜ます
ゆ(カマヘ)ゆ苔るうゝるよつゆ法れてらびひるくこれがひるるものハゝえぬぐるのと
おぼ〜てうゝちもし〜もてうゝるとゝ〜て出でよつゝゝそゆらんずるよひるゝ〜ひ
んハよりのぬぐゝれバやぐてうゝもぐ〜やうゝふ義すゝ〜をとるのやうのふゝ
見ひ出(イデ)んと仰(オホ)きる慶上るゝ〜ハ夜(ヨ)ふゝぬれバさゝうゝもぬうちのもおうゝぐの朔(ア)
ぬ承(ソケケ)ハうるひひるて水(カハ)の法とるの菓(クサ)のるうるひるきゝ文くの義をとゝく
て朔服のそぐよつゝそもて寄りてうゝきれるゝちてこの義をつゝゝるぐう
うそうく時(文)上、とくゆらんぐつゝそおぼ〜のゆ袖(ソデ)ようつ〜とるてつゝ

うくゝてまてまゐりゐして内侍のゝすけのさゝやかなれ帳のうしろにひらをそちらゝゐしてものゐどのゐふようの内侍のゝすけのほどちかきまこの簾をさゝをてつゝゝゐぐゝうそふきゐへばさるうすものゝ所ゐほゝゐどゝてつまれしれば殘る所なくゝゐるときは内侍督ひゐゆゝのさゝやとうちもるゝひ云云てのさまをうつゝて簾巻ハ考るきゝものゐり所柏絵のさまハゝうどゝづゝゝ簾をつゝゝゐひして内侍督をゝゐふさまゐるを彼柏絵よハ源氏のきゝゝ簾をつゝゝ垂てゐゐりるくゝゐり出ゝゐひて云紅々宮のゐをとりゐふさまよ云ゐゝゝるハとの由ハひとうゐぐゝえんゐるゝよとゐりゐゝていゐふて事趣さゝうそれるゐうよゝゐるハ作者のゐもちひよゐれることゐりさいゝ所柏絵よ簾のうつはゐつはゐるくゝりをとびふをゝどのゐらんじてこの

ひうゐかても物ハゝえぬゞくと思ひでゝゐふさまよゐひゝハ自然かてさることの時よひゝうそハひるものゐ又此ものゞくゐハ女のゐゐゝようとゞゐる由ハ源氏物絵のごくよれふ簾のひうゐをさゝ出ゝゐひゝを玉蔓のうくゝをひうゐをひふぎゐてさゝうゝゐるハ女のゐゐゝようていとえんゐもゐほゐれど所柏絵のうちかてハとよらうくゝぶき女よゝゞふる内侍督ゐるよひゐゝ乃るゞゐやとうちるゝひゐるハひゐまゐるよ世ゐれねゝるさまよゝえてえんゐるんむゝのうすくゝゐゐれもと作者のゐもちひよゐれるゐもひるゞれど所柏絵ハ女のゐゐゝようとゝすゞゝ

絵合巻よ左ゐほひとうひるもてよすまのあき出きゝるよ中納言のゐゐゝ出ぎようりひるゝゐもんゝてもそのまゐハんとよすゞれゝるを

えりおきあくるようるふぐきものく上ものんのうぎよ見しすま
て志づうようきあつるハことふぐきうこあ〜こことよおもぐめ世まて
あうぐことぐめあもえそその世よんぐるす〜うあ〜とおぼ〜ほどよりも
おむ〜うんひりうきまはんよおぼ〜えむことぐもぐ今のゆうまうも
ホのさまおぼつうあきうく〜いそのうれおくきひう〜ありきうの
まうむおをとうろくようきまぎてまほのかハき日紀よハひう〜え
れある歌おどをまぐしれるこぐひゆうう〜うれをとうくおぼさえ
さまくの内縁のううこれようおうつりてくひうれるおもむろ〜
よろづうおお〜ゆづりそひぐりうちよりりぬ云云
花冠記よよハとう〜ぐのゆ〜の集をよりあをあふよう〜〜てう〜うりぬ

いゃひうう〜ちぐめつさ〜うよおうちそとのあひておぼとあぐ〜ふをくまるりて
よりあをあふ美のときむりあよこれハおぐ〜とぐあさをあひてう〜ひつひうきて
はらんずしれば〜うの志きし〜をあうよりおい〜をりて おぼのさう〜よつりてひつ
さこすむうりめそひとつよハ例の女のまりあこぐりよひをうきひとつ
よハさう〜ぐうりおおぐ〜どひとつよハうこうむおひとつハひう〜まりまづれいの
まををよりまさをあふめぐ〜うきことうぎうりあ〜云云 いまひとつをとて内こん
ずしばうれハとう〜ぐ〜ぐ家よりつ〜ぐ〜出こちもうう〜〜そうりあるひひ
ぐよりむぐめて京のむすめのうこをひひそあていひてをあくよ歌ひりこ
れしばおもうろくう〜きことハうれよハりされりそのりきふ〜もとりひうりて
ぎ〜めてうれハ内侍督のうるぐきことぐもよてそひりれうこりやとのあふ

さも侍〜ぞうれいを侍〜んとてとゆうれば帝ほうもてよとてたらんずるおお
もちろきうゆ〜きことゆうゆ〜まことよとゆうゆる君は扨んでのもゆ
そのゆて天人ゆうゆめひ〜時よそひつめうることぐもそのよ〜ゆるゆる
めでゆふことゆぎゆゆ〜云云てのさまをうつ〜とゆて縁会のことをつくゆ
そくてえんよ云ゆき〜ものゆされバこて縁会のことをそくすまのうゆくの
君をバひう〜の中宮の内侍よさゆ〜もをゆふよ〜よい〜るも此物語よそどの
これハ内侍督のゆるゆきことてのうさまひ〜をふぐそうるよひう〜ゆや君をも
雑ゆハよつき〜ことていひうくさん此物語ゆるも彼物語ゆるもともよそどの
ゆ百をゆ〜おゆ〜ゆ義ゆる日記をも〜も彼物語よハえんゆるうことゆとゆ
出ていひ此物語よハ実地ゆることよをて出ゆ〜ゆどことのさまをうゆ〜ゆむ〜

をもうゆ〜れバうつゆ〜ことゆハ思ひよらゆ〜ゆどことハひとゆるをそ思ふ〜〜後
ゆ〜ゆハその女のうゆよ思ひをよを光君ハ紫のうゆのことを思ひゆふさまよい〜るも
親ゆのゆう〜ひゆ〜ひとすぢゆ〜ひゆれバ今ひとゆきざゆのぼれることを
いさんゆてゆをのゆとゆ〜ものゆ也ゆ〜ゆよ男女のゆ〜ひよハゆきゆ〜さゆ
ゆきことゆいと多くてゆちゆさゆ〜ゆれゆるうことのふゆ〜れバゆ也ゆ是ゆのことも
今ゆゆき〜ゆとゆ〜ゆさゆびゆるとのゆぢゆゆて此物語をうつ〜出〜ゆことゆ
いとひゆきを何ゆもうゆ〜ゆん
吹上君よ吹上君の内許よてゆ〜ゆの朝臣ゆるよゆの朝臣ゆどの人〜
内ものゆうゆ君ゆゆ系よゆ系よゆゆふゆ人のゆらんゆんゆことゆるうゆこゆ
ゆき女ゆどハ多ゆるものよゆそひゆれゆゆいゆ〜ゆ〜ゆんゆある人のゆむすゆ

どもゐどハいと多くて男すくなき和ゐれバゐろよりらゐ〳〵ぬもよき
女いと多くつきてゐんぬるするよき女とゝ〳〵どひとりひるハひ〳〵きゐろよ
おとゐ〳〵るものゐれバゐれもくと男ひとりよ女ゐろゐろゐつきてゐん
ひるとい〳〵バひるゐの君多ゐる中ゆも出つるきの大将さてハ家内ゐどのくを
むすゐゐども女ゐんひゐゐゐきんゐよゐんものゐ〳〵ゐふと承ゐる家内ゐの女ハゐゐ多ゐ
文大将どの君達ハきもの〳〵ゐふゐをとこ女ゐど人ゐよゐよゐくまきゐ
ゐ〳〵ゐその中ゆも男ハ七郎よひゐゐゐゐふ侍従女の中よハ九よひゐゐゐふ
ゐんいとゐよゐくもの〳〵ゐふゐの女君をバ呂今の天下の人えゆゐえすぐ
し〳〵ゐゐ文ゐれゐれ文えゐゐゐれどおもほ〳〵ゐるとひれバえひるまゐと
ゐゐゐゐゐゐ〳〵ゐ文えゐふゆゐるゐよいとひゆ〳〵ゐ〳〵ゐおと〳〵ますゆゐゐゐちゐゐ

むゐゆゐ出ゐんゐまゐゐゐるゐそいとひゆ〳〵ゐれゐゐゐゐまゐいとひゆゐゐゐゐハ
父のおとゐのふゐゐゐのゐゐ〳〵聞きて多くのゐゐゐゐ〳〵ゐひゐふゐることハいとゐゐゐ
ゐゐれそれゐゐゐゐゐゐゐも咲ゐゐすゐゐよてひゐそれ〳〵ゐゐゐれゐゐゐゐゐ多くゐ
ゐゐゐハおと〳〵てゐゐ巻のゐるゐゐる彩松風のとほきひゐきよのゐゐゐる彩をを
ゐ〳〵ひゐをゐふよハゐゐゐものゐふ〳〵ゐ人耳ゐゐてぬハゐゐゐきお将
その中ゐも源宰相のゐゐ〳〵きのひれゆもひゐゐゐゐ居ゐ〳〵ゐを〳〵ゐ
ゐて老の世よものひゐれゐ〳〵れ文侍るを多く思ゐ〳〵られゐ〳〵ひるど
の君ゐよいゐるゐゐゐ〳〵ゐよそよ承ゐるゐよひるものをとのゐふ云云又
初秋巻よまゐよゐの大将の出絳よゐゐ不まゐの大将のまゐゐゐひて出絳
し〳〵ゐふ条よ世のゐゐのんゐきおほゐ〳〵きものいらゐひる女のゐゐゐひるゐもの

いひくるゝかどするゞ彼女(カノヨミナ)のいろ〻きまゝと見ひるゞくるゞんとぐめてうき
くるふをみるむかりらうひるものをそなれむうゝさゞのそうどの時(ミトキ)
承香殿(ミヤストコロ)の西面(ヨミナ)むかりの女をそなくぬるかひやゝくめでこうゝ人の
心(ミコヽロ)ちんよをそひかゝうまきよりいまゞ中将(ハヾ)よ待りゝ時うの西面内宴の
まうあひよひかりあひて老(オイ)殿よきゞひふくよすきくるをすのうち
よおむしまゝすようちくるほどよさゝふ魂(ムスヒ)あくありていでいきうゝんと
もや(キヨ)えてしうかと見ひきくりゝまいくるもりようひりんやえをあての
ちくゝハきめてやえゞくハすほどよおぼゝゞらふやひゝんとくえゝ
ほどの西ふを見(ミ)ゝゝそよふひれはらうひりゝうまきよりゞ老(オイ)の世(ヨ)
その西ふをうりゝむりよるものあくひれはんおもほえぬつひよう

とくてやをあひふゝものゝのあひもゝぬとゞのひれゞくのをまりて
いとゞゝく魂のもくらんくもきゝをあてをひりゝうくる女の今世(イマノヨ)よひゝじをや
右大将今世の女のあくひりゞくきゝ西面ハ仁壽殿(シヤウデム)の女御(ニヨウゴ)をおもゝます
らあこの承香殿(ウケヽヽ)承香殿よさくくよおとゝぬ西面りりうれまきゞんよひること
あゝバをとりやさをらあこいくゝきことあれどむゝやをることひりゝをくくよ
のあひむるおさでくのやとのをひりをてをくのすきゞををらんゞくるりんいと
ひりゞくきゞ今よいとくまさくよやえさする時あどおるゝやりるものくく
とほきを西ひハあほおるゞやりあれどをくのすきゞをを西ゝんぎゝれぬる
あどやあいひるゞのおとでいでいづくるりゝをうまきよりゞるくハゞのおくりりハ
さくるんひるくハひゝんその承香殿ハすぢことりりゝ人の西ハをや大将(ハヾ)よさハ

この内ふくはひやうやうまさるの女御の君のゆふべひろうしとゝのへ給
おとゞまるきよりの許よりあゝんやはよろづのとむつゝうと思ふときこゆく
つをゝんのことをすまして思ひひろうし右大将三条どのゝ中将して仁壽殿
の女御の内ふくとゝのへ給へるゆふべひろうしのおとゞはたゞ門佐の君にてむうしの
承香殿の内侍所の内ふくとゝのへ給へるゆふべひろうしんじゝくぶるゝさゝゝゝおも
とゝまさゝゝゝ更にとしくてとゝもおとゝまさゝゝ更ひとゝきはゝひろうしの
おとゞ仁壽殿にうるきゝ人よりてひろうしむうしより後世までハいとゆるさゞの
内侍の女御ぞうゝそれとゝまおとゝゝぬるゝどもゝゝまさゝりおゞまさゝりゞ
許よりおこせるふくこれはおぼえくるすゞちのおもほえぬとのゆふ云云ふくこゝきの
ことをうつゝとゝてまきくのゆゝるる雨夜のものゝゝりハまるゝゝ生ゝことゝゝ此物

語るハ二ゝきこゝきのことゝるを彼物語ハおほくの女のゝくを集ゝしも例の
此物語よりハ今ゝゝゝまゝるきんをゝをつくさんとゝのことゝぞうゝ彼物語よ
光君の内厨司ゝるふゝどもを陪中将のゝりゝくゆゝうよりゝ云生ゝハ
此物語ゝるまさゝりの大将ゝゝ内ふくひとをを思しよを
ゝゝるゝゝ是ハ内ふくひとををむゝとゝゝとゝれど彼ハ陪中将の内ふくをゆう
ゝゝりゆゝさまゝゝとりゝて女のゝゝゝゝるをむゝとゝゝもゝのさまをゝゝゝと
とゝゝゝ古物語のことをとりゝ生てゝゝの作文の料とゝんゝもとのゝろ
ゝちしよりゝゝふゝゝゝ也ゝゝとゝゝれゝることをゝど云ゝゝすゝれど源氏物
語をゝゝゝひてつゝり生ゝふゝどものすゝゝゝよゝふつゝぬもゝとゝれのゝゝゝゝ
てゝゝゝゝんをゝゝゝつゝぬよゝれるゝりと師の云れゝきゝ是ゝ彼物語ハ是

陪中将左右兵衛佐義式部丞型臣人のものぐしあり　この吹上よりてひりしハすぐ
しの御所あるべの御所あるよりの御所ゆきまきの御所菊のこかてこそ
余の人くハ黙よりひりしさまあれバ此物語あるも臣人とハすべし
玉葛巻よりえ〜紫の大まの笠うゆうぐのくよりひりしをハさる
がうめきしとあべしも義京巻よりえ〜大宰帥あべのますがひてこそや
をよびし〜さまをうつ〜ることゆそ玉葛上のいとよをあくて思ひまどひあべ
あべのますがもひときざき大夫の笠をいろ〜きさまよつかり出れバ也
うちきくさ〜もいと哀と思そるふうれすあもこ男ひるをそく云れバ哀あるべ
んもちひのさまをよく〜あ〜ふべきるぎあろ〜
夕霧の大臣ふ〜ふかておち〜時大学よりあし〜ことと女巻よりえ〜ハ

祭使巻よりえ〜るすゆあきの御所のねひ〜もちよりあり出るさまをうつ〜る
ことあべ〜ふれハべ〜きをれなことうべきて考り出〜もさまをうつ〜也大学
院のさまよ〜ちるどまこく知べ〜ふ云る中そも清ハべし
蓬のすゑ巻玉よ余の巻よ春秋のうつりくらべあを云ひ〜そふとハ初秋巻よ
ふえ〜まきよまるよりの大将よ院あひし〜年のくもの巻舎のらうひるさま
をうつて花をもものとてあ〜夫よ今あきし〜やひるあるんべ〜をうつ〜也
玉葛上の内侍督よりあひしきまハ初秋巻よとしうべ〜女を内侍のうえま
あうれ〜をうつ〜ら有也されど此物語よハとをつきく〜しうふ云べ〜ふれど彼
物語よハまるむれ〜しきをバまぶきし〜もろうをう〜ものとふべ〜ことをてこそ
うど内侍督の使ひ和よ〜をあてこものべうすえのふさまをどハしとつよ文巻

光君六条院二条院つゝもしてむすめ〳〵うましあひ〳〵ゝくを集てすまを
あふとハ義井君よりゝくでの大将ゝゝ父ゝ不まさのおとゝのむすめうましあひ
ゝゝくの一条のおとゝよすきゝゝれ兵あひをゝ父おとゝよすえうして三
条のおとゝよむすめうまあふさまをうつくしくるゆえうい光君のゝひるをいとん
とよしてひれうれいゝくゝでの大将のゝひゆゝきことをいとんとて也
梅枝巻よ明石の中宮のゝ料よとて光君ゝ条のゝゝくゝきくのゝ
きて条〳〵をあふとハ藤壺女御ゝくゝでの大将よ仰きて条宮のゝ料よゝ
かもとあさをあふ趣をうつくしくゝる也さしど彼和経よハゝくゝくよゝ
求させあふハどうハ〳〵あふ由をゝでゆるゆえ自然えんゝるんゝでもゝゆれハ也
明石中宮の条門のさまハひてゝゆのゝよゝゝ後壺女御のゝまゆのことを

うつくゝゝゝ此物語ゝもうれよハとゝきて也
夕霧巻よ落葉君小野の尼君の絵よゝうれすゝゝよ薫大将の尋ね
〳〵とハ菊宴巻よ三条上さゝゝくゝの中納ゝよすきゝられゝひて志賀の山本
ゝるひえのつゝの家よこゝゆおゝ〳〵まゝすゝゝよゝくゝでの大将さゝゝ〳〵の中納
言とつれてゝゝのゝくよゝのついでよ紀象をゝとんとてゝゝゝくゝ家小
之入るゝふとをゝゝゝゝ〳〵ゝ光中将おどのゝくゝゝをゝゝとも
三条上よすゝずゝの中将ゝゝ余の人くゝのゝくゝゝゝゝまゝくゝゝゝうと
これをゝゝハ〳〵てひゝとゝゝゝゝゝを勢ゝゝ
若菜上巻よ六条院よてタ霧の大将柏木のうむの君ゝ条のゝ
ゝくゝ源氏君のゝゝよてゝゝ鞠ひそゝ〳〵ゝゝ条よゝむの君つゝきて

花ごろもかゞハしくちるもやさ〳〵よぎてこそおどのゝあひつゝ宮の
ほまへ苔のゝこをきゝめよゝれバ例のことゝおきまゝぬるもしどもしてゐゐく
こぼれいでゝるゝすのつまくすきゝゐどもるのゝふゝのぬき袋やと
おぼゆ西ハル帳どもをどゝるゝくひきやつゝ人きちゝくよづきてぞゝ
ゐるゝ〳〵ネこのいともひきくおゝゞるをすこゝ大きゐるネこの
おひつぎて係ゝすのつまゝもゝを出るゝ人くをびえさもぎ
てゝをゝくとゝゞゐきゝまゝふゝもひどもきぬのおとゐひ耳ゐゝ
まゝきんちす猫ハまどゝく人をゐつゐぬゐや猫いとゐゞくつき
ゝゐるをものゝゝ引ゝゝまつもれゝゐるをゝゞんといこゐゐふほ
どゝゝすのゝバいとひゝをゝ引ゝゞれゝるをとゝゝゝ引ゐほすゝも

ゐゝこの植のもとゝゝひゐつゐる人くゝもんひゝくゝゝゞゝもものおゞゝゝゐる
ゐゝもひどもゐゐル帳のきゝゝすこゝゝひゐくゐる所どゐゐちきすゞゝ
てゝゝゐる人ひゐもゝゝゝよゝゝのゝこのまのゐのゝバゐれバまゞれ所も
ゐくひゝもゝゝゝれゝらゐ紅梅ゐゐひゝんゐきゝうすきすきくゝ
ひゐまゝゝゝきゐゐくゐる々ゞゐゐゐゐゝゝゝのつまのゐゝゝゝゝえて樣の
ゐゐものゝほをゐゞゐゐゞゝれゝくゝのすゝゝまゞくゝきゐゝゝゝゐる小糸を
ゝゐゝゝくゐる毋ゝゝゐゐびきてすゝゝゐきゐゝゝゝゝれくゐるいゝゝゝくゝゞ
毋七八すゝゝゐゐゞゞひゐまゐゐる所ゞれゞちゝいゝほゝくゝきゐゝゐゐてす
ゞゝつきゝゝゝのゝゝゐゐゝゝゝゝ

る若君の花のちるをそこなはぬ童どもをとるとて人くはら
えをふともえこらつるぬるゐ猫のいくおくばとりつかまるおかしら
とてあしおどしとおいらうめてもくうつらの人やとをとえこりの大将
いとうこはいかくれどもしいまらんもあるくいとうるくしこれバでんを
えさをてうちあそびきめこるよどやをこいすのふさるハるがんふもいと
ひつぬんちこめこど猫のつるやをこつれバんやもひつまこうちおぐうるまこ
てさびのいをきあこるる右衛門督ハむネつとふこがのてこれだうのまこハ
ひこんこらの中よきあこきこうちぎすぐこすのも人まぎるぐくもひこ
ぎのつるにこるもしおどんよこのておほ四云云
國讓ノ巻
よこくて右のおとゞまぬのあひぬとて左衛門督の君若人お將家ひとの

伝従おどまぬのあつり家ちおとゞこちぎこるネふてこくびやこいこちこん
とのあひてこえでのひをやこよきぐりこる絆よこ生あひおこき鞠のこあこと
こうじあひて此鞠ひとすす云云家ひつこすのこうをとのあバ夜辺をぐこふ
所よ今寿ノネふのそこうあきやとのあひて外あひてこの此方よいさとく人きぶ
ら〳〵ゆやこうひのとのあバめのとむネつぶれていこぐゆふこんと若人お將もすの
こよ后あひてこの人をあこれバ右大將どの主をくあきこ生あひいおここや人后ぬ
おどおそろこきつもものひのくあり外よてハあこるよてハとさぶおここんと
のあこバ家こちに目もきめておき后あひぬめのとハ身もひえもそこるれかもひこ
で后こり云云又樓と巻よあここでの大將の中絆よすぐこの中納云おそこま
して此物語きあふ巻よ入日のひとひこくさこいこるこいぬ家白きこうすもの

ほそあがりよりふくひるのこうちぎをきあひてくくハ三尺の几帳よりくぬほどあり
くくハいとをよりかくるやうよりてほそをもぎよむづれるりひきのちひさき
さゝやあひてちごおとゝおとゝも三尺人そひて引れどうろくよりてすのもとよりくん
あくたちをくるふ風のすをふきひるがくるたゝくるル帳のそむよりうくくうほの
すきてくくえをくるやうごいうほいとちるやうつくゞよひるめでこのものやと
くくえあふをゝ不人でゝあまでゝあてくくやりあふよ大将ひやゝとゝおるをあふひるくハ
あれがいとあびんるやとて立をくばるよのゝあびんるるぞうろき時ハうちもてほの
うふ人よくくえをくるくそうつくくゝれ世中よりくあるあふ人もむゞよくぬハんちむ
つくき時ハいでやいで有久とくやるものゝ也いとゞうよの物思ひ出きぬゞき
よるやりそひうゑうつくくおほえをふまゝこそくえをふとそひりあひて

ほめのとくちよゝとひるまくうありくくをんひりつるひくゝゞきるゞありちくう
ひくぬるゞいとひくくとのをくバ蝶のくすのもとふとび行りつるを此をきあき
くくのゝれをとくむくとさるゞ行りつるを出らんでつるをんとやをバいとこの
おとゝおゞもいたくくあやとて出あひぬ云云この右大臣とひるハうゝ不まるこのおとゞ
一一左衛門督ハくゞずくくの胡臣義人が将ハちくずくくの胡臣家といるハりくゞでの
胡臣の北方女一家右大将ハりくゞでの胡臣るりちくずくくのが将女一家の臣妹
女二家よくくそくくして此鞠のまゞれる女二家のすくくふおとゞよ女一家女二家
とゝ家くくちもひとうたちをおとゞよすくくうりを之ものびるくりくくをりくゞでの大将ことのさまをやくくめくく
ものりあひて独のあひくくせこのつくくゞるまかてハちくずくくのが将ものくりあく
ものびよりるるさまやもやふゞくれどゞ独くくゝ更之よりあるよ女二家のれめのと

をうゝしおきあひ〜ことのひかり〜あるべ〜そのことをゝもひくさゝゑと
てこの条のつぎはうくて二のゝやいや宮ハこのおとゝのふ〜のゝこよおもゝ〜ます
彈正宮ハ二のゝやのれめのとゐどゞ〜て、おもゝ〜まをど女御の君のゆえおきゝ
ぬれバ二宮の御弁よ夜も昼もおもゝ〜ます義人が将、いゝぞおどおぼをど男
宮おもゝ〜まいて、いさゝうゝ〜きひることゆゆる人もか〜この二宮よ思ひゝゝ〜ぐ
ゝる君をハゞゝるもよつきてものをゝゝをつぬすまをまれとのあふもひかゝ
義人が将ハ中納言の君とそ市男よつきつゝゝまつる人よゝうづのさゝゝも
のをゝゝをあひつぬすんよいれよとのゐどさるべきをもか〜いゝあんひまふ
いんとうゝぶしあふ云云ひるもて智るべ〜この弾正宮ハ仁壽殿の女御の
市ゝ〜のゝこふて女一宮女二宮姫宮あどいとつ市ゝ〜のゝこれバ女御の

もひよりうゝることをゆえおゝ〜あゝるべ〜さてこの川出〜ふゝつのさまをとゝ
て女三宮柏木のゝむの君とのことハゝゝ〜ゝるありこのあ絵あることハんまあや
うふてゞよさゝることもひあ〜あゝめとゆふむゝうあれ独きゝるあ尽ゞ〜
宮蟬丸よ伊豫介がおゝ川の家ふてを姫の君彰瑞萩の君と市碁ひをた
すを源氏君ひまゝ〜あふさまハ國讓丸ある女一宮とひて宮の市碁
ひをむ〜をさ不ゞの中納言市ゝ〜のひおよゝうあひ〜さまゝうゝ
あふことをうつき〜もの也

椎本丸よ宇治のゝやふて蓋大将大君中君をゝいまゝあふ条よ
胡すゞこのほどよ出あひれどひやふくよさ〜ゝるいゝゞまゞやく
て宮のおむき〜西のひさ〜よとのゐ人め〜出ておそすをゝゝのとや

の仏(ホトケ)の中(ナカ)あるは素(モト)ぐもちものしあひるをらうらうとして家(ヤカタ)方よ
るるりあふ中(ナカ)そしの志のびられどおのづからうらぐろあるほど
ちく学(マナ)んれバあほひるぐよるるようふさるぐのむしの
うとようらぐ不志るる家よひるのすこしひきくるをうあきあて
れバとるよ立(タテ)る屏風(ビヤウブ)を引(ヒキ)やてをあふてをとるれ帳(キチヤウ)をく
立るひるおをしと思ひてひうるをすしも風(カゼ)のすぐれをいるる
吹(フキ)ひぐぐうめれバひるハあもをそひれそのれ中(ナカ)ル帳(チヤウ)出(イデ)てをとふ人
ひるるおこがまきものうれうてをぐるきもらぐきもル帳をく
まのすおしよをてこのさぐよむひてひきるるさるぐすひるるるほ
らんとあるるる先(マヅ)ひとる立出てル帳よるさしのぞきて涙れとの人くの

とるるあきちぐひすぐをひるるををあるるるこきあびをのひとくよ
くハざるのむるまのをてをやしるる中くさまるるるて花(ハナ)やるるるとる四
るハきあしあるるるぐるあるるおびをるるおぐよ志あしてずひきるるて
もあるるるとそびやるるやぐぐいおるぐるる人の髪(カミ)るらさふかし
るるぬ涙どあしんとるえて赤(スエ)ちるのあるれひるくるやくとるら
るるるるるるるぐあるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
よやるるるるるおほどきるるるるひ女一宮(ヲミヤイチノミヤ)もるるさまよてそおるるず
きとほのるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るのるるるぐハひるるハあもるるそひれとるをるる用意(ヨウイ)るるるとる
るるぬさまるるてるるひるんとおぼやるるらるるきるるるるるるのほどるますと

ひのそよめきまめらめきさまゝありひるまは屏風もきてゝ侍りつい
そぎてゝものぎきあるもでとろきくゝ何こゝろもなくいつひり
いとゞゝもひるぐきまどうおどそうしゝろめてゞよぬぐりひり
あふほどそこうゝろふくきゝそひてゝゐろきひを
をひとうゝ不おすゞやうある色ひひをきくれどこれも
あつゝゝうあまめきて紀ゞよこゝろゞるゝゝおぼゆゝさ
むゝうある程どよおちつゝるあるゞゝ未すこゝ程あて
をありとう云めるひすいぐもていとおうゝゞよ糸をよりう
ゝゝるやうるり蛍の袋ようきゝる經をゝまよ持あつる
まつきれすもほろゝまゝあてやきゝあるゞゝをゝりつる

君もさうじゝちは吾て何ごとようひゝんゝあるゝをゝをこきて
まゝひゝるゝいとひひぎやうつきゝり云云

團扇(クヽユヅリノマキ)光よゝくて曉(アカツキ)よりありゝゝゝゝもおろゝまゝ(ズ)二条(ニヂノミヤ)の内方よりあゝといゝ
ゝき市屏風(ビヤウブ)をゝりおもすする所いとちうゝれば内屏風(ビヤウブ)をやてゝゝるゝゝり
ゝゝも大将(ヒヤウヱノカミ)のおり宮達(ミヤタチ)ゝ皆ゝでいゝそうと思ひて一宮(イチノミヤ)いとよくおぼゝとの
こゝりゝれゞふゝをもふゝゝて内屏風のゝゝよりのぞゝれゞひりぬとおぼえ
てをとゝ宮ゝちはおぼゝとのこゝりゝり二宮(ニノミヤ)内ハ(ミキ)ハ(キヤウ)帳のゝゝびちいうちゝゝて
まゞおりゝゝ更(ズ)おきゝひていさゝうゝるゝとゝんとおぼゝていゝりまゝるをいとよくを
ゝりあふ白(シロ)きひやひとゝゝ和ゝりて内ゝゝおどおぼゝとのゝりふゝゞあゝれど
いとゝゝらゝゝうつゝゞゝりとゝある服(ヒメキミ)君もおきひゞりゝるをれいまゞちひ

さくらさかりなりてありよくもうつくしうつくしうつくし

ゆもほのめかしことあるこの物語はまことの人々のなどいふはあるべきことをそれと
これとかうかうおとしてはこれ物語なる人々のんどくあるべきことをもそれとまもる
捨て出ていふべきことあれどさのみはそちらさあらもとそさしおきぬまことのつづる
べくいでこべしこれどこの物語はまことの人々のあるべんどくをもとるべくのことをも
いとよくんはあるべきて源氏物語をまんはこれがうるをまもとでもよくあるべしまも
あるべきがやうそまづべくの作文の料とあるべし古書をまねびてまづべくの作文
の料とまる人もひれどこの物語はまことの人々まよくぬきとりてあるべくぬるものべく
いちあるべくひるもれ出てまもれこもいも何ぞや作者といふべき此物語はまことの人々
ことをかうして源氏物語は出べくさまをまねとあるべてまねびてあるんはひるべくん
ものはまを引べくさまはあるべくあるつの物語を作者といふことのをつくることもべく
引出べいかべくをまて大んを考べべ

思ふべきれとあるべき更まづべくのいをとるべくまつることふてふまのべくあること
よひべく更此物語はまことの人々はあるべくあるべくはどもますのもとをとびふ蝶をとべんと
まをまねびて出のあるまをすを風の吹ひべくもを知べべりべくことを彼物語はかべ
不このべくべべくべくの五まのふをもおぢさまをべるさまをまよ云べべべべべべべべべべべべべべべ
あべべべべべを自然のさまをまべべべべべべべべべべべべべべ

いまれ（やまとの考ハうつほの物語考とて一巻ありなり）師の玉鬘巻三（榊葉巻ヨ田中道麻呂の考えをのおのれしるど大ごとあれバ漢ひらがなまじりこと多くこゝに巻くをよく考えて一巻ごとを出て巻の序を定めぬ並と云ことハ源氏物語かもひらがてきるやくひらがなとよハひらがなに不ど物語ふこのてびりよハ後よりふべきことをも先ゝの出て然もそこの始をバちぶきて居る不ど又こと巻ごとの始をバ居るを何をきるこゝに不て此物語よハいと多くこのことハも物語ふこのむらちハさるゝろ考えハ考ゆゝくしことあゝ初学のものハゝることのゝきゝゝあひりとゝ巻でみだれ〳〵おどさゝうとふゝゝれゝがおどろうゝひりゝ物語かも並の巻くひりゝうど巻をしさゝ偽のゝをてきどうあゝ更このあ物語の並の巻のきどうあゝしさまハこゝに並源氏物語河海抄の巻ゝ揉巻の注釈よゝもこゝに並の巻くもも考定めゝことハつぎよりふゝゝさて序のゝぞれゝさゝひるよ無巻の

上中下の序をもゝぞあゝをやまとひらがなよ考おき道麻呂も考云ゝことどもの説ありと思ほめれバそゝまゝ考て上中下の序を定めぬ今の揭本ハ巻を分て三十巻ときゝうちの巻ふもと巻の礼入ゝもひらおあゝことのゝる巻よ出ゝもひらが又ひとつ巻あゝゝことのあ後とゝりもひらていとゝゝりゝがゝきものゝぎりことくゝひらゝことめゝもバ絵よふべゝ己ゞ素巻よゝゝえゝあとふいゝゝあこのひめゝふゝもていれバ揭本よゝゝがつりとてゝゝゝひそこの外人くの支職かもゝぞれゝことゝものひれバよくんゝてゝゝるゝ（右大将 右大将）部都は民部ひるゝゝよ語り云源氏物語のいとゝゝきものを偽れる和くさゝひりゝもゝゝれゝと考ゝく物語ゝりゝゝゝ八系巻を考ゝゝ系巻も考ゝゝゝゝゝ物語ゝゝ云る事よゝゝゝ事よ考ゝゝ初学のまゝふゝきものハ巻ごとよ絵ひりゝものかて巻絵のゝゝもゝきゝゝゝゝもも揭本よハひとつゝよきつゝ不ゝれバ同ど

ことのをきてありて、つると思ひまどつる和くひかきいこど俗ゐるきこの詞ゐハこゝハられ
ハこどゆゝの紐を始よおきてををへざてゝれバんとゞめてゝうてもえんよハいとく
をるゝゞし此俗とき紐も作者のゝづゝゝきくものあれバ人くの齢の保ど
あどいつるゞやくとゝりてゝゝび年をもを巻の序とも定めて接とをもも
多ゝりき今の指本ゐも俗ハひれどゝられハしも後の人のをゝぎゝれバ俗ときの紐とハ
ゝとく俗のきまゝりゝれバやくゝきものゝゝ又指本ゐ俗ときの紐の
始よこれハゝハこどの紐のおち
ゝゝ和くもひれバよくゝゝをゝゞ
巻の序のゝゞれしをハやよゐも道麻呂もよく考云れゝれどゝもゐ巻くの
うちのゝゞれいを後考を更て偏へゝられゝゐゞよ云れゝことのゝゐつとハゝえゐ
ゝゝびゝゝともゝちまゝれる並の巻をいもれゝもまゝ然ゝゝを由を云バ道麻
呂ハ藤原実方の二巻のゝを並とゝ狭苗代系此人の考ハやよゐの梅花巻祭
宝物後考よゝも

使菊宴の三巻を並とゝゝれゝゝもよゐゝびの巻くゐゞゝまゝ序ゝれゝ
きまゝゞびゝゝれバゝとのよゝゝ序ゝ更ゝゐ海抄よ此物後のゐゝびのゝとをゝるゝれ
しも古俗のきまゐゞゝ紙ゝゞゝれバゝゝび巻くをゝゝハゝ定めて年をもゝる
しゝゝれどゐ保ゝ後ともゐゞきゝゐゞきゝゝよゝゝ年をよゝゝハゝゐバゝゝ
ゝゝ思ひ潰ゝゝとひゝてゝゝゐくゝゝるゞしゝゝよゝゝるゝ時改めふゝもて巻くゝれバ今年
巻ゝゞれゝゝんよハまゞびぬゞれバよゐやてゝゝゐぬゞ

第一 後ゝゞの巻 上下の序今年のゝゝ

此巻の後ハ源氏院巻の始まゝよゝゝれる也ゝゝ由ハこの巻よ年ゝゐて八月よ右大
将相撲のゝゝひゝゞ志ゐハ云云とゝゝゝれゝをつゞて源氏院巻の始よ右大将度
よゝゝひゝゞ志ゐハ云云れい例のゝとゐんと云ハ此巻のつゞきゐるをひゝさんとゝくゝき
しもの也又此巻よゐゝゞの朝臣の紐よまゝとゝゐゐゐゐ氏族もゐゝゐ

君をうらみ契りおきてくゝひすえよとゐんのおくをしゝあつずゝかもあつ作を
られて源の将監仲くゝの娘をもさる契りあるとゐん
作をゝしあくゞいとうれきおどくゝとのゐひて云云 源氏院巻よりあつゞの
侍従ハつネよこのとのきつて云云 源侍従のきゝをたゝくゝと契りてゝ
らふと云るも此巻よりえゝまつぎてい(る也) 源侍従ハあつずゝの朝臣とのつさて
ども ハ梅上巻よ この巻よりえゝるとゝゞの族のこと
つゞくよりえゝ

才二たゞことの巻 ゝゝゞの巻並一

此巻ハたゞこの冬梨のゝゝをむネとをゝ巻る此巻をゝもとゝゞの巻乃
並の一とをゝ由ハ梅花巻巻よたゞひぶりより素日ゆゝまきよりの大将よりゝ
あく巻しあしゝ時ゝづゝゝのゝゝを云る朝よんうく侍ゝゝバネんじひまり

てゐんゝ十四巻ハてゐんまりこのゝゝ今年二十年よゐん侍りぬる云云ゝゝ
もて迷ふ幸徒をゝゞふるよ梅花巻巻ハたゞこひぶりの三十三巻のときのり
あゝゞの朝臣二十三巻の二月廿日よまきよりの大将素日よ猶でゐひ
たゞこひぶりの十四巻のゝをゝゞふれバあゝゞの朝臣三巻のときゝ小
ゝゝゝ ぬれバとゝゝゞうゞよりゝ年よゐ侍り故とゝゞの巻の並の一とハ
定めゝ左麻呂ハ此巻をとゝゞの巻の並の二とをゝゝれるハこの巻の続よたゞ
たゞひぶりの内父ちゞの大臣をゐゝとをゝひ後ネ君巻の始よちゞの大臣の
ゝえゝれハ巻ハ巻をゝゝ後ネ君巻のつぎよ此巻をおゝれゐゞ後ネ君
巻よちゞの ハのゝ ハのゝえゝハまきよりの大将よ女一宮をあもゝ時のむゝを
ゝゝるふて宮地ハひで宮の十二巻のときのとゐれバちゞの大臣をゐひてゝゝ

の年を往しことぞうしうくこうしむうしをうう出ることあり絶ふこよハいと多き
ことあり狂言綺語を云バとうぐの巻より不まさの大臣とうぐの女東極内侍のおう
うぐをふ山のうつほより逆しあふとときの絹よむうしちうぐの大臣のうぐひとうをを
まくむくよむうしれて今ハ高わもゆえ更とひう此絹よ依しんよハ忠元巻
をしもとうぐの巻より あよおくぐしや 既云ごとく 物語ふこのてぶりふて
 扱ることをもやうあく云出るるざあれバ何ぞもうこうふぐき此うつほより
あうぐの朝臣妙子をむうとうあ巻るハあうぐの朝臣十三巻のときあれバ忠元
ひぐりの法師よりあひて既よ十年ぞうあうふれバ不まさの大臣の
むうとのあんとつきあうう更又忠元巻の始ようくてまし清涼の内時よ
とひるもとうぐの巻の終ハ朱雀院の内時あれハ立うしおの代のことを云出る

あれバうくて又とハいつうくる絶ども ひれバうぐび並の一とハ定め

第三 後京君巻 とうぐの巻並二

此巻ハ多くの年を云るさまあれど既云しごくむうをうるふてひそ家ハ内年
十二と変えるる二月より内裏等る ほどもあくおとあり出あハ云云うえし年より
次年の七月までのことをいつうとうぐの巻ようえうるう不まさの大臣の八月よ
相撲のううひるど去あふ年の若年の七月までのことをいつる也うくさぐう
されバ此巻ようえしまさよりの大将のれる達の齢の ほどく 国落 殺多巻よ
おあど忠ぐもの齢のうくうあひしことを云しよひも不バ也 此巻の二月 ひくこや
の年 とうえしハあうぐの朝臣廿一 巻の年のことあり 忠元巻ハ十七年ぞ
うも絶し後のとうれバ並の二とハ定めし

第四 嵯峨院巻 今年の義定の十巻ハまことのさがの院の巻なれ今年のこの巻とさしハ出家の十巻也道麻呂も書いつ〻

此巻ハとしゝゝの巻のつぎなる由ハ既云るごとしさてとしゝゝの巻ゝゝゝゝ

ゝゝまきの大臣の相撲のゝゝ月の比まで也るして相撲のゝゝ年の八月むゝゝ次年の二

ゝゝの巻ゝも此巻ゝも云ざるハ並の巻ゝゝ云れバなるべし

第五 梅花笠巻 嵯峨院巻並一

此巻ハゝゝまきのおゝ相撲のゝゝ年と同年ゝてさがの院の巻ハ

八月むゝゝ云巻ゝゝ巻ハ二月ゝ云始れバさがの院の巻ゝゝ亟

ゝゝ云れど並ゝゝ更ハ既云るごとくさがの院の巻ハとしゝゝの巻の終

ゝゝきを引くゝゝゝんを巻の始ゝゝまきの大臣のゝゝ

ことを引のゝゝ生れさるゝゝ此巻をハゝゝの一とハゝゝ也ゝく定めしバ

此巻と吹上巻とゝゝゝもの多くてゝゝゝゝゝ称つぎゝ云る

をゝて知るべし

第六 吹上巻 嵯峨院巻並二 今年ハ二十ゝゝ今年の十を上とゝゝ今年の上を八十とゝゝ麻呂も然いつゝ

此巻もゝゝまきの大臣の相撲のゝゝ引ゝ年と同年ゝて梅花笠巻の

終ゝゝる也梅花笠巻の終ゝハ三月の頃ゝ引ゝゝ巻ゝハ二月廿九日ゝゝ

ゝの頃ゝの人ゝ吹上のゝゝゝゝゝを云るもてゝゝゝゝゝ

ゝれどゝゝゝ更梅花笠巻ハ引てゝゝゝゝれることを云ゝゝゝゝれど

そのことをのゝひて巻をとゝるさて巻ゝハゝゝゝゝの相撲の巻ゝ

ゝまのゝゝ神南備のゝゝゝまつゝゝゝゝゝゝゝゝゝの相撲

ざえのめでたくうつくしきまゝにほのめかし出て糸ある人くちをれば愛
てたぐひなきまでうつくしうをかしげなるやこの人の彼女はなほ
あはれのおろかなればや此巻は三月ばかりのことをいふにうつくしう趣あれどこれも
物語ふるのてがらなりて実の巻は二年まで後のことを云つゞけ初秋
巻はうつくしうして実の巻の二月中の十日は始の庚申なり年の古月なり
よりいふるゆゑのことなるよてうつくしげなれども此巻と梅花笠巻とひとつ年
なりと云ハ此巻は一日書日はてうよりあくるゆゑにほのかなるゆゑ
んとやきこまるの朝臣が云ハ梅花笠巻はうえ〳〵書日後のときのことを云つる
この書日後二月廿日はて廿三日は実はうつくしう則おうこの朝臣なるの人ハ
同じ廿九日は又吹上のもまは出たちあひ〳〵やいとほどちきこと也又吹上の

家はてすゞしの朝臣おうこの朝臣なるの人〳〵むつものゞうゝ〳〵ゆふ糸は此
書日はて此そも〳〵こうの彩はてをうこおうこ多くあうこおうこ〳〵とあるも
書日後のときはて実の琴はあひ〳〵ことをうつる出るゆゑおうこの朝臣
の愛あひ〳〵さまハ梅花笠巻はうえ〳〵もてひとつ年なるゆゑ〳〵さて
此巻のとハ二月はの日の始まで也さて〳〵下巻ハ八月はの十月の始まで
をあるきは日月はの七月までのことをばたゞきぬそのをおくるをバ祭使巻はある
き〳〵此巻〳〵のはいと年繁くて巻彼はうこおうこ〳〵巻〳〵はことを
はてはうこうきやすくき〳〵を後は巻の序をこゞめて年はうこうきこうハはう〳〵ど
いとあひ人なれ狩祭使巻はもとあて云べれど年三の巻をこうて年大斎をバ
知るべ〳〵此下巻も同年の八月はうよて祭使巻の終はつゞきものなるをひと

巻とさ〜ハすゞ〜しの胡床のうへをむかと云るさ〜巻あれバひとつゝとハさ〜ある
ゞ〜此巻を梅花笠巻と同年ありと云る説ハさゞの院吹上のもまゝよ成巻
の時ひのくるゝちゝき社ゆてたゞひぐらゝ讀經〜あふぎをサたてるおのてゝらんゞ
あふ象よゝうどおこゝあひ人をほの〜ゝらんぎ〜やゝまおぼさる大將おゝ〜せおろ
ゞおどハ春日ゆてゝあひ〜ゝうバそれと巻ど恥畏か〜をおぼ〜て巻今もいゝ
ゞうゝひつるをゝれバ初〜ぬやゝふてきめ〜ひあふゝどむ〜あゝゝらんゞるる
人をおぼ〜ゝるゝ出をおぼ〜ゝ出てそれるゝゝとおぼ〜さゞめ云云ゝゝ〜
よておゞ〜年あるを初るゞ〜

第七祭使巻 源氏院巻並三

此巻ハ既云〜ゞとくゝ不まゝの大臣相撲のゝゝひゝゞ〜巻あひ〜年と同年ゆて

吹上巻の上下の巻よ巻てゝるゞきもの也然ハ此巻を吹上巻の中巻ともすゞ
きとあるゝと名をいひこと巻とさ〜ハいふゝどゝゝゞゞそれど年よゝゝゞひ用
並よゝゝてゝるゝ〜でゝるハ史書ゝどいふむ糸〜きゝふゝのゝくゝれ初絶ふゝの
てゝゝよゝ〜ぬとこゝゝりゞゞて初絶ゝゝのゝまゝハまゞいゝゞきゝとをゞきゝゝ〜云で
ゝさてゝと事の云ゞきをゞゝゝ〜おゝゝゝとゝゝ由もゝく云知ゝゝどゝゝの巻ど
ゝあゝきゝゝちゝゝてゝゝひゝゝ年のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝる人のゝゝ巻ゞ〜ゝゝまゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ〜文今の俗のゝゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

吹上君（すゝしの朔日）の中人をむかとうるあれバそよひづゝぬことをバちぶきに此
巻よりつることてすゝしを由ハ此巻ハ紀のくるの吹上のきゝの中絃よりいつて
と思ひるるを人くさうるゆをくれバ云云ハすゝしの朔日より始て
ひて宴の中絃よりあるまゝすゝしの時のことあり吹上の上巻ゆてあるすゝしの朔日
当の人くすゝしの朔日とむつものゝるの時ひゝこゆのゆくをうるいでゆふ
とひのゝうゝられまでもうるゆ偽を実も去ゆふぐられどをハゝのあるゝでゝ
朔日とおゝぐうゝぬものゝゝいゝぐさいふほどかハひゝぐもぐあどもひるゝ
あゝゝを系よひゝゝきさまあるあるゝでの朔日当の人くうるゆをえきを
れバといふことるるをゆ此巻ハ二不三不まゝすゝしの中名を云で紀のくる吹上
君とのゝゝゝも吹上の上巻よつゝぐき徒あゝゝあゆ吹上の下巻かてさゝの院

吹上乃もまよ中巻ゝゝあひゝゝ時よ後上をあるれ源氏をゆひ中名をすゝゝ
とゆひられど此巻ハ実ゆあのゝとあれバゝで吹上君とそいゆぐれ又吹上の下
巻を此巻のつぎとをゝゝ由ハ吹上の中巻のときすゆふさうゝときものとをゝ
ゆゝて吹上の中巻の中位よきあゝふぐきよゝ仰をゆふと吹上の下巻よりえゝハ
此巻よまゆるきよゆの大将の家ゆてすゆふさのざえのほどを始てひゝゝ巻えき
れバこのよゝまきよゆの大将よりもの序よ奏されゝことのひゝゝあるゝゝ然
あゝぐさんよハすゆあさうゝときものとをゝゝとふぐゝゆハ吹上の下巻を此巻よ
つもおのことをバまきよゆの大将の家よてすゆふさのざえのほどをひゝときを
まきよゆの大将を外の人くゆ愛ゆふいと遅きことてふぐゝ吹上の下巻ゆて
門のゝうど神泉の紅葉賀ゝゝあふとをすゆふさよ試の彩ゆひて去よを

さるもことの始終をとゝのへつゞけしるすとあるをも

第八菊宴巻　嵯峨院巻並日

此巻ハ弓不まきのおとゝ相撲のゝ事ひらぐ三ゐひ〜年と同年ゆゑ吹上巻の
終よりつゞくる也吹上巻ハ十月の始ゆゑ此巻ハ十一月
朔日より巻末の殘菊宴〜あるゆゑ吹上巻よりつゞくべき由ハ此神泉の
庭華よりつゞきのおほいすきすゞしおゝぐすゝるゝゝゝんとゝめて琴つゝゝまつり
よりゝゝの朝臣よ一の内親王すゞ〜しの朝臣よりまさよりゞ九よりゝる女あゝぐき
よ〜きん〜ゝゝゝゝをゝん侍る云云まさよりの大将喜宴よりゆゝゝふこと
此巻よりゝゝゆて初るゝ〜神泉の内宴のことハ吹上の下巻よりゝゝそこゝ
すゞ〜しの朝臣よりまさよりの大将の女ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの朝臣よ皇女をゝゝすゝ

ことゝもゝゝ〜ゝゝ云ハさゞの院の巻よ年ゝゝて云云すゝゝゝゝ大内記喜宴学
士よりまさよりことゝゝゝゝゝゝ此巻よゝゝよりゝゝゝゝゝの大内記といつゝゝ又ゝくて年
ゝゝゝゝ云云の条よ正月十八日よりまさよりの大将の家よてのゝ弓のゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝさゞの大后宴よ正月廿七日のをとゝ年よ六十の内賀ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
此巻ゝゝもさゞの院の巻ゝゝゝゝゝゝよ云ゝゝゝゝゝ並の巻ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うまつゝぬるおどろくつゝまつるめしうそのをりつゝまつゝ更ゐゐふし
云云ゐゐよりの朝臣がいつるハ吹上のたまの井の時のことをふれバそ
年ゐるハひろきことも也

第九ひて宴巻　嵯峨院巻也

此巻ハさゞの大后宴の六十の年と同年の十月より次年を云ひ
まゝこゝ次年の三月のころよりてゐめてハ三年のことを云ひて嵯峨院巻の終
菊宴巻の終なるよつぐゐ又二月ゐうの十日より始の庚申出きゝる年ハ初
秋巻よりゝ行ゐ二のゝゆ生れゐふ年ハ田露釋奠巻の年の事ことを
云へるゐゐうくゆくすゑのことをもゝこれるハ既云ゐ〳〵ごとく初終ゐゝの
ちぶゐよてひて宴のときめきゐふ逐をゝゝゐる也ゝさゝえのむゐとゝ〳〵

ことハ皇ゐひまゝいできゐゐゐゐゐゐ〳〵のことゐゐれバゝく云でゝてゝゝ巻のほど
をゝゝゝゐゐひて宴ゝ宴よまゐゐゐゐふぐきを定めゐひ〳〵ことハ菊宴巻ハ仁寿
殿女御と申母大宴との申ゐ給ふも給ふきことゐてゝゝゝ人のぎゐんまどハ〳〵
ゐふことゐどもゝしをハ云知〳〵さゝゐどゝゝゝるハいち者ゝくゝゐれバ也形
年紀のゝゐれる逐ハ初秋巻田露釋奠巻とも云へゝれど年立ゝゝゝハ
〳〵てゝゝまく知るべし〳〵

第十初秋巻

此巻ハ嵯峨院巻よつぐゝゝる巻ゐて既云〳〵ごとくひて宴巻の二月ゐうの十日ゝ
始の庚申いでゝゝる年と同年の六月より八月までをいつゐひて宴巻ハ
二月より三月までをのひて四月より九月までをバもぐき又十月よりのひて

妻宴の一宴生れあふことを云ふれば年ちぶる月を改巻よいるありさて改巻を
二月のあらの十日より始の庚申いできる年のこといふる由はまさよりの大将の
家よりかれまきこのおとどおもてまして内侍殿えうへあふ家より右大将のおとどの
こてよりまあるりこしいむうへてをもづうへうあふ今はんやすうりるひるじの
おとどまきこのの大将うり今はをうへうるるすべきくやはんんばきっおぼすはとをえあふ云云
うくうれまきこのおとどのあふて妻宴よりて宴のまるりあひへ後あるをあふべへうれ
まのきのおとどもひて宴のををうへうちうりへうばむうへてをもづうへうあるとの
あふ也十年二十年のとほきをも一年二年の程どちきことをもむうへといふるハ
古の例よて内侍をふハいと多へ狩改かも使をすべきことべも改巻よりえ
うれバ續うてうづうへ初るべへ

卅一 冊鷹群書巻

此巻ハ初秋巻よりつぎてまち明年の六月ぢうりうり八月までをいふりひて宴巻の
妻宴の二宴生れあふ年と同年也初秋巻も改巻もとも六月ぢうりうり
云始て八月までよりをとをとをちわへうれバひとつ年あやとあふべへれどもうへ更へうる
例ハ此内侍よいと多へ國讓巻樓上巻ハとをよ二月ぢうりうり云生へうりさ
れどうれハをのをちめ巻へうれど此巻と初秋巻とハをちきうりうへネバよくいとで
め更ハまうりぢめ多りへうるべへさハいへ此巻よりまきよりの大将の服巻(ヒノキミタチ)の年齢
の程どを云るもて初うるをあり今年ハ齢をいるるうへ
ふるる外くりりれしてうるべへ改巻と義孫巻ハ
六年へべへりきへの院巻とハ四年へべへれりうを由ハ此巻と彼巻とをまきよりの大
時の姫君巻の巻齢のほどひるハすへへの内侍ありをでの内侍をるの巻齢をどいる

ゆてうぞく初るべし其齢のほどもだに年立又系図ふも書すおきられざるハして
ゆゑ〳〵又此巻の始より内のうちどの市殿より屋すぐしあるべきぐろくハいつれもあ
どすぐしぶか表のうぐしゆるひもちのまる大将まさより今この八月だろうふと
あんぶかるすぐしの朝臣むろうハ志ろやふ巻しを書家より書しあるべし
おのよりまれと作きれをうるきんしあんひるとやをてあほまるきよ
ものうしハ奏さんと作きれうバあんまるを作りしをそのうりふとやるを
るものちひさく作るほどよいまぐでをこうり作る云云ひるハ内のうちど祇園
よて紅梨賞志ゆ時すぐしの朝臣るうでの朝臣名琴よるくつろうまつり
うる市ろくのを也書家よりをうきるりしハるやく義系君巻よろえうり
をうもちづうゝまさよりの大将よ文えあしゝハ菊宴巻よろえゝを也これを

ふぐゝてまさよりの大将奏しゆつりこのちまさよりの大将大家と市物後よ
こるうこのも大家ひるうこのもおほねぐのうゝうりうことよりきほどよりふるをとのふ
ふて年のへぐゝりしを記るべし

第十二 義経巻

上中の二巻ハ今かのごとし 今年の下巻ハ源氏院巻なる
由ハ既ようり国讓の下巻とキ〳〵今年ぞこの下の巻なれ
このとハ元麻呂
もいつりし

此巻ハ国務釋名巻のつぎふてまゆ年の十一月のほどよりひてまこの年
を云ひまり明年の二月までのことをいつりあめて三年のことを也まを由ハ此巻の
下巻よ書家のちぐゆの家ハ若家と中ア市巣ゆのほど云云中の家ハほと
いつるハ書家の一家二家の市ことるり此いつる市巻もて此巻ハ三年のことる
るを示べし此家巻をしもひて家の生めし家のことるうまとうふべ名れば

そのゆゑを云べし此家達の代齢をうぶ出ざるおよぶちつぼ いとゞ
人のあるうゝを今の后よりそハ坊ゞ未をひとりあるゆも ひゝゝ更ふるまで
玉をうゞきてもとまる云云 ひるゆてやふゞし 修験どもの多うれどさの
こハもづゝゝ れバのまゝ更

第十三國讓巻

今年の中巻を上巻とし今年の上巻を中巻とすべし今年の下巻を下巻とす
の選縁院巻ハ此巻の下巻なる今年の下巻と共ハ
義家巻の下巻
石麻呂もこのことハいつゝ

此巻の始ハ義家巻の終の年と同年なり彼巻ハ二月までのことを云て
とぢめなる此巻ハまゝ二月より云 始ふれバと年のさまあれど然ゝ更とハ
初秋巻と田舞群多巻とのとぢめのごとし此巻ハ義家巻の終の年と同
年の二月より云て次年の三月までをいひてなりて ハ二年のことも也さて此巻と樓上

巻とのるゝ二年のことを脱ありそハ大安の代齢のほどを樓上巻よいるゝ
なハざれバ也是をもて此巻の始と義家巻の終とハ同年よハひゝゝ
うゝぶもひるゝ れどまゝく然ら更を徒ハ此巻ゝ去年の冬人ゝ文をで
代おゝて代ふゝつゝうまつりあひきとゝ元しハあるうゝの朝臣門のゝうゝの代お
ゝて外祖父とゝゝゝの朝臣の文集よゝあひしゝをいひあり玉題ハ義家の中巻ゝ
ゝゝゝ又あるうゝの朝臣の綱ゝ去年の去年すゝ代ふゝつゝうまつりゝゝろくゝ
あんとひるゝ然ゝひ義家ゝ貞伝ゝの代石常をゝをあゝ時の綱ゝて去年の去
年すゝ代ふゝつゝうまつりゝとのあゝもひゝ外祖父とゝゝゝの朝臣の文集よゝあひしゝを
いあり貞伝ゝの代常を代ふゝつゝうまつりあひしゝろくゝ門のゝうゝどよりあゝ子と
も義家の中巻ゝ(も)義家の下巻ゝ年ゝうあて れバ云云 ひるハ此巻の始の年と

同年あれバそこらどの内ふかくかへりてゆひ〜を出年とハのゆふ
ゆれ猶を綾を云バ羅壷女御梨壷女御などのちゝゝゆふよ〜を義兵の下
巻よほのめ〜出〜うゝゆ此巻の始よて生れゆふよても同年あるをゝ

才十四 脱巻

此巻ハ二年のほどひるべき由ハ年立の条ハ妻云ゆ

才十五 樓上巻

今年の下巻を上巻と〜今年の上巻を下巻とすぐ〜乃麻呂も然云ゆ〜

此巻と國讓巻のゆハ二年のほどを考る〜巻の脱〜とハ年立の条ハ云
るゞと〜ゝ二年のほどゆる年の条ゆ此巻ハゝゆ知る也ゝ由ハこの
巻ハあゝゝゞの朝臣の絹ハ大宴をおろそかおぼ〜ゝるよてゆるゆれ云云
つゝまハゝまし〜と思ひ侍る来年ハ七ハあゆゆふとい〜るふて思ふゞ〜琴

深ゆつるゝまあゝゞの朝臣の京極の家ハ内裏〜ゝ〜る時朱雀院ハ帳の
ゝゞ〜ゝ〜ひゞゝゝゆふ趣ゆどもをゝて也ゞハあゝつゝゆゝハゆゆ〜るとハ
ゆゆゆめてハ大宴六巻の表のほどゆ七巻の八月十五日ハ遥遠院朱雀
院の両院后宴ゝゝゝゆ大臣諸臣達彼巻ハ侍りてあゝゞの朝臣の
京極の家ハ内裏〜ゆひゝゝ〜の内極のゝをつくして後大宴のゝひ
琴きこ〜ゆ〜愛ゆふゝをいひ此内裏の勅賞ハあゝゞの朝臣の外
祖父ゞゝゞの朝臣ハ三位の中納言を贈らゝゝを云て巻をゝゞめ〜
趣もゞハをゝとゝを云

字佐保物語新紀一の巻